説教要旨　「平和への渇望」

マタイによる福音書２章１～１２節

イエス様が誕生したとき、ユダヤの王様はヘロデ大王でした。王様といっても、当時ユダヤはローマ帝国に支配されていましたので、実質的な支配者はローマ皇帝アウグストゥスです。ヘロデ大王は、王を名乗ってはいましたが、ローマ皇帝によってユダヤの統治を委任された一領主といった感じでしょうか。ヘロデ大王はエルサレム神殿の大改築を始めとして、エルサレムの劇場建設など多くの大型建築を残した有能な政治家でしたが、猜疑心が強く身内を含む多くの人間を殺害しました。不安に追い立てられ、自分も人も苦しめてしまうという悲しい人だったように思えます。ですから学者たちからユダヤ人の王が生まれたことを知らされたヘロデの胸中は、想像するに難くありません。学者たちに『ユダヤ人の王』の居場所を知らせるように申し付けますが、彼らは戻ってこず、「ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」（2:16）という幼児虐殺を命じたのです。ヘロデという男がいかに命を軽んじているかということが強調されていますし、新しい王が生まれるために、どれだけの命が奪われてきたのかという怒りや悲しみがこの物語には込められているようにも感じられます。

ヘロデとローマ帝国の二重支配のなかで、本来であれば弱い立場の人々を助けるはずの宗教者たち「民の祭司長たちや律法学者たち」（2:4）ですが、ヘロデに従わない者はみな殺されてしまって、権力者の顔色を窺って保身を図ってばかりいる者たちしか残っていません。絶望的にも思える状況の中で、人々は救い主を求めました。それは決して大それた願いではありません。生きる喜びを味わい、安心して死んで行ける。そんな世の中になって欲しい。それはこの世に生まれてきた限り当然の望みであり、私たち全ての求めるべき権利です。

残念ながら、教会は社会の問題に関わるべきではないと主張する方たちもいます。けれども神様を信じる気持ちというのは、現実から目をそらすことではないはずです。全ての人の暮らしが少しでも良いものになるように、祈りつつ前進したいと願います。

（２０１９・１２・２９　説教者：稲垣真実）